

わが街で暮らす

諏訪市地域医療・介護連携推進センター

ライフドアすわの取り組み

地域包括ケアシステムを支える人々

45

人生の最期をどこで、どう迎えるのか、家族と一緒に話し合ったことはありませんか？

介護老人保健施設は、病状が安定している要介護者に対し介護やリハビリを行い、在宅への復帰を目指す施設です。しかし、長期入所中には状態の変化により終末期を迎える場合もあります。

入所中のAさんは、飲み込む力が低下し食事を口から摂ることが困難となりました。安全に口から食事が摂れるように多職種で形態や姿勢の検



討を行いながら介助しましたが、徐々にむせることが増えました。これ以上悪くなると口から栄養を摂ることが難しく誤嚥や窒息の危険もあります。そのため、施設医より家族へ、生命維持のための医療（胃ろう造設）を望むかこの

「人生会議」ACPとは④ 施設での看取り

富士見高原医療福祉センター 老人保健施設みづうみ 看護師長 武川 千鶴

まま施設で自然に生きていくか、今後の方針を相談して決めて欲しいと話されました。入所前に「延命は望まない」と話していたAさんに対し、家族が現在の意思の確認をし施設で自然に過ごすことを選択しました。それからは本人の好物や口にできそうな物を家族にも依頼し提供しましたが、さらに摂取が困難となり微熱が出るようになりました。自身の唾液でさえ窒息を起す危険性がある終末期の状態の中で、ご家族から自宅への外出希望がありました。

居室にAさん自筆の「家に帰る、帰る」と書かれたメモがあったそうです。外出中に起こり得る危険性について医師からの説明があり家族は了承され、相談員とAさんを自宅にお連れしました。家族写真



富士見高原医療福祉センター老人保健施設みづうみの施設外観

ましました。Aさんは自然に過ごされることを望み、家族もAさんの意思を尊重されました。旅立ちの場所は施設の一室でしたが、Aさんは自宅での写真映像と家族の中で最期を迎えました。介護老人保健施設には、医師、看護師、介護士、栄養士、リハビリ、ケアマネ、相談員等の職種がいます。入所者の状態に変化があった場合には、本人の意思や家族の思いの確認を行い納得した最期を迎えられるよう、多職種が協力して支援をしていきたいと思えます。

自分の人生を自分らしく生きるため、残される家族のために、「もしも」の場合の生活・医療・ケアに関する意向、希望や思いについて考え、家族や身近の人と是非話し合ってみてください。

(毎月第2日曜日掲載)